第 2 号

昭和 40 年 3 月

会　報

発行　北海道高等学校
教育研究会事務局
（札幌市伏見町1872の 4
札幌旭丘高等学校内）

ごあいさつ

発足二年目の本会の歩みをたどりながら、今ほっとした感じでおります。研究大会の開催、研究紀要の出版、会誌の発行など、どれを取っても、北海道という広い地域のことを考えるとなかなか容易でない仕事を、会員や事務局員の方々のお骨折りで進めてきました。紀要や会誌などこれからお届けするものが残っておりますが、軌道にのって予定通りに出来上るものと思います。どのプログラムを見ても熱心な参加者が多くなり、それを整理するのに役員はうれしい悲鳴をあげている始末です。今後とも会員の皆さまのご要望にこたえて、会の運営を充実して参りたい決意でおります。皆さまの忌憚ないご鞭撻をお願いいたします。

現在の教育界で一番問題なのは中等教育の制度であろうと思います。「すべての青少年に中等教育を！」という要請に応じるとともに「質のよい教育を！」という二つの面から、中等教育の在り方を考え、それを高めていくことは、世界的に共通した問題であると思います。

こうした中でわたくしたちの高校教育もさまざまな角度から検討され、前進されねばなりません。自由な研究会の存在理由はまさにこの点にあろうかと思います。巾広い視野と教師として責任感によって研究会の活動を盛にしなくてはならないと信じます。お互いに困難はあっても、それはやらねばならないし、またやり抜く価値のあることでしょう。

本会の目標が必ずしも高校関係者の間に正当に理解されているとはいえません。会員の皆さまの一そうのご自愛、着実なご研鑽を祈って止みません。ミケランジエロのように信を千年の後に問うというつもりで前進しょうではありませんか。

会長　梶浦善次

☆ 教育研究大会

第２回研究大会開催の決定をみてから、本部事務局では、昭和39年10月以降数回の会議をもちその準備にあたった。

12月に入って大会参加の申込があり、それが20日過ぎになると急激に増加し、当初予定していた旭丘高校講堂では収容出来ない状態に至った。

事務局としても、嬉しい悲鳴をあげながら会場変更を考慮せねばならない羽目に陥った。

年末でもあり、容易なことではなかったが、幸い札幌静修高校の好意で12月29日会場が確定し、30日になって改めて変更通知を全道に送ってあわただしい年の暮を送ったのである。

大会参加申込は実に600名を越え、しかも大会当日には、それが700名以上にふくれて本道高校の研究会としては、嘗ってない程の研究大会に発展したのである。

大会日程は次の通りであった。

１月12日(火)　於札幌静修高校

9.00 ～ 9.40　開会式

(1)　開式の辞

(2)　挨　　拶　　会　　長　　梶浦善次氏

(3)　祝　　辞　　道教育長代理　　斎藤三男氏

札幌市教育長　　中島好雄氏

高校長協会代表　　萩原獅郎氏

(4)　閉式の辞

10.00 ～ 12.00　研究発表

研究テーマ「教育課程編成上の問題点」

札幌旭丘高　　梅村　茂

札幌工業高　　佐藤嘉正

士別商業高　　福士八郎

喜茂別高　　柳川重男

12.00 ～ 13.00　休　憩

13.00 ～ 15.00　講　演

「日本教育の課題」

東京学芸大学学長　　高坂正顕氏

○ 講 演 要 旨

「人間は教育される動物であり、教育されなければならない動物である」とカントはいっている。

まさしくその通りであって、人間が身につけたものは、教育によって次の世代に受けついでいかねば滅びてしまうものである。

さて教育を考えるとき、

1. 教育の作用として、過去からの文化遺産を次々に譲り渡していく、即ち文化遺産の伝達がある。これは教育における過去との関係と考えることが出来る。
2. 教育の機能として、時代の要求に適合させていくこと、（そこには勿論時代の欠陥を改めていくことを教えることが含まっているが）があげられる。これは教育における現代との関係とみることができよう。
3. 教育の未来との関係において、創造的な人間の成育、即ち、理想を考え、その理想を実現させようとする人間を作る使命。

といった三つの要素をもったものとしてみていかねばならない。

そこから「日本教育の課題」を考えてみると、過去において、わが国は明治以来間違った方向に国家が動いていったが、そうであるから日本の文化、文明、道徳はすべて捨て去らねばならない論理にまで結びつくものかどうか。私はそうではないと思う。

また、現代との関係で、理想的な国家というものを論ずると同時に、それをになう理想的な人間像はどうあるべきかを考えていきたい。

更に、日本の理想としての国家像と日本人の理想としての人間像を結びつける方途は何かを真剣に考えていかねばならない。それが未来の関係として把握されることである。

（文責、本部編輯）

１月13日(水)　於 札幌旭丘高校

9.50 ～ 10.40　公開授業

11.00 ～ 12.30　分 科 会

12.30 ～ 13.30　休　　憩

13.30 ～ 15.00　分 科 会

各分科会での研究発表の概要は、次の通りである。

△ 国 語 部 会

○「春」(１年)の模範授業（教授者　関　良一氏）をめぐっての質疑応答

(1)作品の扱い　(2)単元と作品を結びつけた扱いについて　(3)亀井「転向」の扱いについて　(4)テーマの問題

○研 究 発 表

(イ)　遠田昭良（札開成）氏の発表要点

昭和40年の時点設定のもと、古典の意味や教育現状を再検討、今後に期さんとする論

(ロ) 獅子原正（札南）氏の発表要点

資料にもとずく実践報告で、平家一有島一藤村という文学教材展開の線上で古典解釈の方法を現代文学教材読解に移行、成功を見つつある指導法を述べたもの

△ 社会部会

(イ) 亀山省吾（奈井江高）氏

「生徒の思考発展段階に応じた指導」

○倫理・社会の三分野をどのように関連づけて展開させるか。

○思考の発展の度合をどのようにとらえるか。

○他教科、または特活との関連をどう考えていくかといった点についての意見があげられた。

(ロ) 梅沢　馨（小樽桜陽高）氏

「倫理・社会」指導案作成について

一時間毎の指導内容を「導入・展開」の形でやる場合どのようにすればよいか。その指導案を作成してみた。これを作るに際して10社の教科書検討をし、その内容を比較し各項目の頻度等により指導する方法も一つの方法ではないか。

(ハ) 大沢昭夫（札西）氏

「社会科（地理）におけるカリキュラムの構造と問題点」

○時間数の削減と、教科内容の拡充との関係

○地理専攻教員の不足

○大学入試問題との関連

等々について現在の問題点を指摘

△ 数学部会

(イ) 井原　肇（札開成）氏

「数Ⅰにおける論証の指導」

○教材は代数を主とした理由として、例えば背理法等が幾何のみに用いられたものでないことをあげている。

(ロ) 上田　晃（旭北）氏

「数ⅡBにおけるベクトル教材」の検討

(ハ) 野村明正（札旭丘）氏

「数学カリキュラム」数ⅡBの指導上の問題点

○能力別指導の問題とか、○記号、用語等の統一といったことが質疑に出た。

△ 理科部会

(イ) 物理：

○物理A、Bのとり方　○2年生と3年生での分割履習の状態　○物理実験書の作成

(ロ) 化学：化学学習の問題点について討議

○単位数の問題　○分割履習についての長所、短所　○実験時間や実験の扱い方

(ハ) 生物：生物指導上の問題点について

○生物の4単位について　○単元の進め方、生徒の理解度、等について参加者から発表。

(ニ) 地学

岡田　明（札南）氏

「中学校における地学の取扱い、高等学校における地理中の地学関連事項、高校地学教科書内容の取扱い順序」についての提案があった。

△ 保健体育部会

遠藤　忠（札東）氏

「体育の学習指導をより効果的に進めるためにはどうしたらよいか」

について発表がなされた。

△ 芸術部会

◎講演、「芸術教科と人間形成」藤野　武氏

○創作表現のメカニズム

①昇華　②移調　③技影　④象徴化　⑤退行　⑥カタルミム　⑦エスケープ

○研究発表　中野友房（札開成）氏

「芸術教育について」

現代の科学技術時代における人間の自覚への教育そこに芸術教科の位置と役割がある。

△ 英語部会

(イ) 小林謙一（札北）氏

「読解指導の再検討一表理力を高める観点で」

教材を、もっと creative な一つの idea の流れにそった Situation のはっきりした比較的長い文を書く指導に活用すべきだ。

(ロ) 新妻英勝（旭北）氏

"Writing Ability をいかにのばすか"

生徒に共通した欠点として①スペリングの誤り②無理な語結合③構文力の欠如があげられる。指導段階としては①単語指導②連語指導③文法指導があり留意点としては①作文指導と文法事項の指導とは分離がち②生徒は基本的事項を忘れがち

(ハ) 野元哲浩（遠軽）氏

"Speaking"の能力助長するため教科書の英問英答に利用できるが、ここで ELEC Controlled Conversation

を授業に取り入れた。
①Answer in English をそのまま活用　② Text の一部につき ELEC 方式の drill　③課中の重要な成句、構文を含んでいる文を選びそれらについて問を作って drill する。

△ 工業部会

○間口増等によって生ずる学力差の困難点を教育課程編成上でどう解決していくべきか。

○教員研修を如何に進めていったらよいかの二つの議題について討議された。

△ 商業部会

(イ) 浜崎静夫（芦別啓南）氏

「商業科教育上の問題点」

○期待される人間像について

○後期中等教育のあり方

○商業科教育上の問題点

1. 制度上　2. 教育課程　3. 設備　4. 少数学級の統廃合　5. 産学協同について　6. 女子の増加　7. 教育の近代化　8. 教師の問題

(ロ) 畠　清（旭川北都商）氏

「北海道商業クラブ（仮称）の設立について」

自ら企画し、創意する行動的な人間を育成することをねらいとして結成してはどうか。

(ハ) 田村重見（小樽緑陵）氏

「商品科の効果的指導法（私案）」

○生徒の自主活動の助長

○教師の研修

○参考図書の整備

○商品実験実習について

○施設・設備の拡充

○教材・教具について

更に卒業論文を提出させる方法についての効果を述べた。なお、研修として内地留学の体験と見解を述べた。

△ 農業部会

(イ) 斎藤忠義（旭農）氏

「技術教育と経営教育の進め方について」

自営者養成からみた農業教育の体質改善の方向について　1. 基礎実験実習の強化　2. 経営教育の改善強化　3. 企業的農業自営者としての生活教育の重視　4. 農場実習の効率的運営と技術修得の組織化　等があげられる。

(ロ) 小野繁夫（南幌）氏

「農業定時制高校を中心として」

1. 近代的「企業者」としての農業経営者を養成することの重要性
2. 農業経営者の役割と技能
3. 自営者教育としての進路指導の確立

等をあげ、その実践的方策を提案された。

△ 家庭部会

1. 部会総会（部会長挨拶、部会別説明、次期役員選出などの取り扱い方）
2. 研究発表

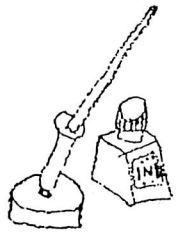
金田エミ（札北）氏

「校内における家庭クラブの運営と推進について」

実態調査によって、問題点を見い出し、家庭一般の指導内容と結びつけて、H・Pへの導入、家庭クラブへの発展にもっていくようにした結果、効果が昇った。

その後の質疑では

1. カリキュラムの困難点　2. 実習の問題点
3. 設備の拡充

等があげられた。

（各部会記録より集録）